

2020年2月22日(土)

生井利幸事務所所管・英語道弟子課程

生井利幸が賦与する正式神聖指導の範疇・枠組みに於ける「Quasi-Ginza sanctuary」の意味と役割

生井利幸

・・・第一部・・・

本文書教材の内容は、英語道弟子課程弟子、即ち、「生井利幸直属・直系の弟子向け教材」です。本文書教材は、確かに弟子向けに作成された教材ですが、本文書教材についてある程度の認識・理解を得るには、弟子自身が、今までの“弟子生活”に於いて、「生井利幸の精神性の範疇・枠組みの中で、生井利幸に引き上げられ、地域的諸要素から離れ、生井利幸の精神性の範疇・枠組みの中で宙に浮いた」という具体的実体験を持っていることが、認識・理解のための大前提となります。

「生井利幸の精神性の範疇・枠組み」とは、所謂、「正式神聖指導の範疇・枠組み」を指します。

具体的に講じると、ローカルな諸要素に囲まれ、それらに支配された毎日を過ごしている弟子は、「生井利幸に引き上げられ、『引き上げられた、その、“より高いステージ”』から、ローカルな諸要素・諸様相を見下ろした」という経験をしたことがないでしょう（この「見下ろした」とは、「軽視した」という不健全、且つ、ネガティブな意味合いではなく、「より高いステージから“眺めた”・“捉えた”」という意味合いです）。

ローカルな諸要素に支配された心のメカニズムの中で生きる弟子は、「生井利幸から引き上

げられ、地域的ステージから自分が引き上げられ、『宙に浮く』（空中に浮く）」という様相・有様をイメージすることはできないでしょう。

「広大なる宇宙空間に於いて、一個の人間は、吹けば飛ぶような『極めて微小なる埃（ほこり）』である」という真理について、これを「正真正銘の真理」として捉えることができない（受け入れることができない）弟子は、本文書教材が講じる講義内容について認識・理解し、咀嚼・吸収することは不可能です。

今現在に於いて、残念ながら「真理を真理として捉えることができない弟子」は、理論・理屈は抜きにして、まず第一に、「生井利幸に『自分のすべて』を任せる必要不可欠性」を正式神聖指導します。

「真理を真理として捉えることができない弟子」であっても、その本人が自分のすべてを生井利幸に任せれば、任せたその瞬間から、真理について「正真正銘の真理」として捉え、「真理の道」を歩めるようになります。transubstantiation への入口は、「弟子が、自分のすべてを生井利幸に任せる」ことで入ることができます。これを逆に講じるならば、自分のすべてを任せることができない弟子（賦与されたすべてのプロセスを通らない弟子）に於いて、transubstantiation を体験具現することなど、“到底不可能”です。

生井利幸が教え導く真理の道を歩む上で、暗記能力・論理的思考能力・分析能力等、一切の能力は必要ありません。必要なのは、自分のすべてを生井利幸に任せ、「生井利幸の精神性の範疇・枠組みの中で生きる」ということです。

自分のすべてを生井利幸に任せれば、「生井利幸の精神性の範疇・枠組みの中で『宙に浮く』」という経験をすることができるようになります。

弟子に於いては、生井利幸の正式神聖指導通りに生きていくなれば、＜不可能な道＞など、一切ありません。心の中の邪念・雑念を一掃し、師の指導通りに「賦与された前」に進めば、その日から、＜偽り・偽物の前＞ではなく、「本当の前」「真実・真理の前」に進むことができます。

＜不可能＞は、そのすべてが、弟子自身の「固定観念」、及び、「地域性の範疇の中で、自分を中心に捉える偏狭なる価値観・価値基準」がつくるものです。

生井利幸は、一事が万事に於いて、常に、「本質・真実・真理のみ」を教授する存在者です。弟子は、生井利幸が賦与する正式神聖指導通りに前に進んでいけば、弟子に於いて＜不可

能>はありません。弟子が、「生井利幸から賦与されたすべての教授内容・プロセス」に於いて、「自分の勝手な都合」で形・捉え方を変えることなく、“そっくりそのままの形”で賦与された通りに前に進むならば、賦与されるすべての教授内容が「自分のもの」となります。

・・・第二部・・・

生井利幸事務所・銀座書齋（以降、「銀座書齋」と呼ぶ）は、銀座書齋入居ビル5階に位置しています。弟子たちの学問の聖域である **Quasi-Ginza sanctuary** は、銀座書齋の真上、即ち、建物の6階（最上階）に位置しています。

生井利幸の弟子は、正式神聖指導の範疇・枠組みの中で、生井利幸が構える銀座書齋の真上に位置する **Quasi-Ginza sanctuary** にて、(1)「太陽系に属するこの地球にて、"a lifelong mission deriving from holiness"（神聖を根源とした、人間の体を使って行うミッション）に携わっている生井利幸が構える銀座書齋」と(2)「広大に広がる宇宙空間」の間に自分の身を置くことができます。

生井利幸の弟子たちは、生井利幸が発する『エラヴェイティッド英語』(**English spiritually elevated**)を介して、ホモ・サピエンスの一人として、即ち、「宇宙空間に浮かぶ”小石”である地球に生息する人類の一人）」として、**spiritual voyage** を現実経験する「特権」(**privilege**)を正式神聖賦与されています。

以下、上記(1)と(2)の関係性について、わかりやすく講じます。

- (1)「太陽系に属するこの地球にて、"a lifelong mission deriving from holiness"（神聖を根源とした、人間の体を使って行うミッション）に携わっている生井利幸が構える銀座書齋」
- (2)「広大に広がる宇宙空間」

「生井利幸の弟子が、上記(1)と(2)の間に自分の身を置ける」とは、一体如何なる意味がそこに内在しているのか、以下、具体的に講じていきます。

< 1 >

弟子は本来、固定観念、及び、自分の存在を中心に捉える自我（自己中心的な自我）について、自分からそれらを捨て去り、自分の身を軽くし、師である生井利幸に自分の身を引き上げてもらう特権が賦与されています。

< 2 >

Quasi-Ginza sanctuary で学習活動を行う行為は、この地球上にて、「神聖を根源とした、一生涯をかけて行うミッションに携わっている生井利幸」が構える銀座書斎の真上に自分を置く」という行為です。

これは即ち、生井利幸は、上から弟子を引き上げるだけでなく、『弟子の下敷き』になって、生井利幸自らが Quasi-Ginza sanctuary で学習活動を行っている弟子の下に自分の身を置き、弟子の下から、弟子の身を支え、弟子を上を押し上げる」という意味を成します。

< 3 >

「生井利幸が『弟子の下敷き』になり、下から弟子を支え、弟子を押し上げ、そして、上から弟子を引き上げる」という行為は、「生井利幸が、この地球上で“自己の身体を使う期間の長さ”を削って賦与する『正式神聖指導』」を意味しています。

「弟子が『生井利幸の精神性』(Toshiyuki Namai's spirituality)の中に自分の身を置き、毎日の 24 時間に於いてそこに住み続ける」とは、「生井利幸が『生井利幸の理性性・神聖性のステージ』まで弟子を引き上げるだけでなく、生井利幸自身、弟子の下に自分の身を置き、『弟子の下敷き』になる」ということです。

正式神聖指導とは、「指導の最初から、生井利幸が“弟子の下敷き”になる」という、「正式なる、神聖指導」です。Quasi-Ginza sanctuary は、この「正式なる、神聖指導」を、“目に見える形”にしたものです。

「生井利幸が、弟子の下敷きになる」という正式神聖指導の様相は、実のところ、「受講生が生井利幸の弟子になったその日」から、現実存在しています。この様相について「見える時期」「感じる時期」は、弟子によって異なります。

< 4 >

生井利幸が賦与する正式神聖指導は、生井利幸自身が弟子の下に自分の身を置き、自分の体で弟子を支え、「それ以上、弟子が下に落ちないように弟子を守る」という“自己の命を犠牲にする行為”です。

生井利幸は、それと同時に、弟子を「より高いステージ」へと引き上げるために、自己の命をはって、限界の限界まで、「可能な限りの最高・最善の指導・プロセス」を賦与し続けています。

< 5 >

Quasi-Ginza sanctuary で学習活動を行う弟子は、自分の身を、生井利幸が構える銀座書齋の上に置き、銀座書齋の真上から、「地球上に蔓延する、地域的要素に毒されたすべての固定観念」から完全に離れることができます。

< 6 >

弟子は、Quasi-Ginza sanctuary で学習活動を行うことにより、自分自身を「生井利幸の普遍的精神性の範疇の中に浮かぶ微小なる埃（ほこり）」として、(1)「生井利幸」と(2)「宇宙空間」の間に自分の身を置くことができます。

< 7 >

弟子は、「埃」であると同時に、『知能』(intellect)を賦与された埃です。この真実が、「この地球に生息する他の動物と異なる真実」です。

弟子は、「埃である一存在」(ホモ・サピエンスの一人)として、この知能を、生井利幸の精神性の中で少しずつ改善・向上・発展させ、(1)『知能』から『知性』への道、この道を通ったことを大前提として、その後、(2)『知性』から『理性』への道を歩むことができます。

< 8 >

弟子が、毎日の24時間において「生井利幸の精神性の範疇・枠組み」の中に住み続け、その中で生井利幸によって少しずつ引き上げられ、相当年数をかけて「生井利幸の理性性の範疇・枠組み」に入ることができたとき、真の意味での「理性的存在者への道」を歩むことができます。この道(道筋)が、所謂、「人類史上・最高峰の哲学者の一人、近代哲学の祖(ドイツ観念論哲学の祖)であるイマヌエル・カント(Immanuel Kant, 1724-1804)相当の理性性ステージ」への登竜門となります。

「生井利幸の理性性の範疇・枠組み」に於ける最高ステージに到達しない限り、「生井利幸の神聖性の範疇・枠組み」を見、より狭い門(極めて狭い門)から、その中に入ることはできません。

通常の教育では、上記の学びの道を経験することは不可能です。しかし、英語道弟子課程では、生井利幸が賦与する正式神聖指導を介して、そのすべての教授・プロセスを実体経験することができます。

・・・第三部・・・

「銀座書齋入居ビル・清掃活動」、及び、「Quasi-Ginza sanctuary で行う学習活動」は、世界レベルの英知・美意識の構築具現を実現する上でまさに基盤となる活動であると明言することができます。

現に、弟子たちは、日々、行っている銀座書齋入居ビル・清掃活動を通して、自分たちの心をより豊かにし、同時に、「より高い心のステージ」へと進んでいます。

Quasi-Ginza sanctuary での学習活動の「学習の質」(the quality of learning)を向上させるには、日々、「この地球上に存在するすべての人々」、そして、「この地球上に存在するすべてのこと」に対する“心からの感謝の念”を持って、銀座書齋入居ビル・清掃活動をしていくことが、そのための重要な基盤となります。

生井利幸が唱える理念の一つ、“Cleanliness is next to godliness.”(清潔は、敬神の次に重要な美徳である)は、「第一に重要なことは敬神であり、その次に重要なことは清潔である」という意味を示す理念です。

godliness は「神聖性」を指し、師である生井利幸は、自らの弟子たちに、(1)「精神性」、(2)「理性性」、(3)「神聖性」という如き「3つの巨大柱の存在」を教授しています。「神聖性」への道のりは、弟子たちが想像する以上に長い道のりですが、弟子たちは皆、毎日、自分を律し、「自分の個」を磨き続けています。

生井利幸が唱える理念の一つ、“Cleanliness is next to godliness.”には、(1)「銀座書齋入居ビル・清掃活動」と(2)「Quasi-Ginza sanctuary に於ける学習活動」双方がそこに内在しています。その2つとは、以下の如きです。

- 1 cleanliness (清潔)
銀座書齋入居ビル・清掃活動

2 godliness (敬神)

Quasi-Ginza sanctuary に於ける学習活動 (精神性→理性性→神聖性)

汗をかくことは、人間存在の本質的経験の一つです。人生経験を積むとわかることですが、人間は皆、汗をかいて、「行った喜び」「生きる喜び」を実感します。

例えば、真夏の銀座書齋入居ビルは、大変暑いですが、生井利幸の弟子たちは、銀座書齋入居ビル・清掃活動を行うとき、または、Quasi-Ginza sanctuary にて学習活動を行うとき、頗る「美しい汗」をかきます。

フランスのバルビゾン派の画家、ジャン＝フランソワ・ミレー (Jean-François Millet, 1814-1875) は、「農民の労働の美しさ」を主題にした多くの作品を残しました。銀座書齋には、ミレーの『馬鈴薯植え』(1861年頃)が飾られており、同作品は、長年にわたって、銀座書齋で学ぶ多くの学習者に対して「労働の尊厳」(dignity of toil)の重要性について伝えてきました。

汗一滴は、「労働の尊厳」の鏡です。生井利幸の弟子の汗は、「労働の尊厳の鏡」であり、「勤勉の尊厳の鏡」でもあります。弟子たちは、今再び、「汗の意味・価値」について捉え直し、それを認識・理解するだけでなく、咀嚼・吸収してください。本教材に於いては、最後に、以下の2つの様相・有様について理性的に捉え、自分なりに考えてください。

- 1 生井利幸が、弟子を引き上げる上での汗
(生井利幸に於ける汗の「意味」「価値」)
- 2 弟子が、「生井利幸に引き上げられやすい自分」をつくる上での汗
(弟子に於ける汗の「意味」「価値」)

生井利幸の弟子を、「世界的教養人として育て、仕上げていく」(即ち、生井利幸として育て、仕上げていく)には、生井利幸、及び、弟子共に、世間一般の普通の人々が想像する以上に「膨大なる量の汗」をかくことになります。

「弟子たちよ、しっかりと汗をかき、前に進みなさい」、・・・汗は、一事が万事に於いて、「自分の行動の鏡」そのものです。